

イエス様の復活で (ヨハネ 20:11-18)

人が死ぬということは、人は元々、死の運命に縛られて生きているものだという表れです。そして、生きているときにも限界に囚われて生きるしかないということの明確な裏付けのようなものです。なのでイエス様の復活は、そのような運命と限界すべてをひっくり返した勝利になります。また、その縛られて捕らわれていたものから自由になる、まさしく革命そのものでもあります。なので復活されたイエス・キリストを心に受け入れるということはどのような祝福であり、また、どのような風な変化が現れるものなのでしょうか。皆さんは神様の恵みによりイエス様を救い主として信じて心に受け入れました。イエス様を見たこともないのに。だから、皆さんがイエス・キリストを受け入れたことそのものが、イエス様は復活なさって今も生きているという何よりの証拠なのです。見たこともないのにどうやってイエス・キリストを受け入れることができるのでしょうか。復活なさって今も生きているから皆さんはイエス・キリストを心に受け入れました。そして、その復活のイエス様はすべてをひっくり返した勝利の主なので、イエス・キリストを受け入れたということは人生の大転換なのです。今までのすべてが葬られてすべてが新しくスタートすることになる、ということイエス様を受け入れた私たちがまず自覚してその祝福を味わわなければどうしましょう。

今日の復活感謝礼拝を通してイエス様の復活で何がどうなったのかということを確認して行きたいと思います。

1. イエス様の復活で、すべての悲しみは墓に葬られた。

まず第一に、イエス様の復活ですべての悲しみは墓に葬られました。今日、お墓の前で泣いていたマリアに向かって主の使いもイエス様も「なぜ泣いているのか。なぜ悲しんでいるのか。もう涙と悲しみは終わりなんだよ」という意味がそこにはあったわけです。理由は、イエス様はお墓の中にいらっしやらず復活なさって今生きていらっしやるのです。死の力を打ち破って生きていらっしやるので、悲しみはイエス様の死とともにお墓の中に葬られたものなのです。イエス様の復活を心から覚えてこのメッセージを心に刻みこみましょう。

1) 悲しみの人生

私たちは実は形は様々ですが、悲しみの人生を生きてきました。また、悲しみの人生を誰しもが生きるしかありません。ある人は、生まれてみたら自分が選んで生まれたわけでもないのに、戦争の真っ最中のところへ生まれる場合もあります。生まれてみたら両親がすぐに死んでしまう場合もあります。その出世の背景そのものによって悲しむしかない人も少なくありません。また、育っていくうちに自分ではなかなか耐えられない衝撃的な事件に遭遇する場合もあります。その内容は人それぞれ様々でしょうけれども、到底容認できない、ショックになるしかない事故や事件などに会って悲しむようになる人もいます。また兄弟どうし比較されたり、あるいは他の人といつも比べられたり、人に無視されたりというような経験が悲しみになる場合もあります。今まで信頼していた人、頼りにしていた人から裏切られたという悲しみを抱えて生きる人もいます。また、人に見捨てられた、それが両親の場合もあるし、今まで頼っていた人の場合もあります。人に見捨てられたという悲しみを抱えて生きる人も少なくありません。今まで大事にしていたものや、あるいは大事にしていた人を失ってしまった喪失の悲しみというものもあります。夢を持って頑張っていたのに、夢が途中でかなえられなくなり諦めてしまった、その挫折の悲しみを抱えている人がいるわけです。また、何かの過ちなどによって罪責感をもって呵責を抱えて生きる人もいますし、また何かのことで負い目を背負って、自分なりに償う思いで生きているかもしれないかもしれませんが、それが悲しみになって人生を生きる人も少なくありません。

2) 心の傷、恨み、

こういったものが悲しみになることで、その人の中に心の傷として残るようになります。あるいは、何か、誰かに対する恨みつらみとしてその人の心にしっかりと根差す場合もあるわけです。そうすると、その人は人生そのものがその悲しみによって動かされて左右されるしかありません。

3) いくら花で飾り、バネにしても

場合によってはその悲しみをバネにして頑張る人などもあります。しかし、いくらその悲しみを花で飾ったとしても、美化したとして元々ある悲しみが消えるわけではありません。何かで飾っただけのものなのです。これが人が生きる人生であり、誰しもが形はいろいろ違うけれども悲しみを抱えて生きるしかありません。しかし、クリスチャンの私たちは、この悲しみの正体が何かをしっかりと見つめないといけません。

4) 神様を離れた悲しみと苦しみ

今申し上げました様々な悲しみがありますが、本当の悲しみはそういうことがあったからではなくて、実は喜びの根源である創造主のまことの神様を離れてしまったときから悲しみは始まりました。つまり、神様を失って神様がいらっしやらない人生そのものが悲しみであり、悲しみの塊であり、また苦しみそのものなのです。そこから様々な悲しみが生まれてきたということ覚えてください。なのでこの悲しみを消して、この悲しみに打ち勝って喜びの人生に変わるということは、神様とまた出会い、一緒にならなければ形がどう変わろうが、根本的に悲しみは終わることなどはありません。皆さんも長い間、人生の経験を通してそれを学習していらっしやると思います。ただ、それがそういうものなのですが、何が答えなのかが分かっていないかもしれません。だから、悲しみが終わるということは形がなくなるのではなくて、神様と一緒にいるための道がキリストなのです。イエス様が死んだ後、3日目に死の力を打ち破って復活なさった、よみがえられたということは、イエス様こそその神様と出会う道、いのちであるキリストだったという何よりの証拠なのです。それがイエス様の復活なのです。私たちはその復活なさったキリストである神様と一緒にいる道である、いのちであるイエス様を信じて受け入れたわけです。

5) ガラテヤ 2:20、ローマ 8:2、Ⅱコリント 5:17、ヨハネ 3:3

なのでイエス様の復活でイエスを受け入れた私たちはどうなるのかと言いますと、悲しみの何かをどうするかではなくて、悲しみの人生そのもの、悲しむしかない人間そのものが死んで新しく生まれることになります。ガラテヤ 2:20 には、私は十字架とともに死んだ。今は私の内側にキリストが生きていらっしやいますとあります。そのようにして悲しみそのものを、悲しむ人生、悲しむしかない人生をお墓の中に葬って、新しく生まれてくるようになることです。それがイエス様をキリストとして信じて受け入れた人に現れる変化です。イエス様の復活ですべての悲しみは、イエス様とともにお墓の中に葬られました。だから、ローマ 8:2 には、悲しみをどうのこうのと言うのではなくて、死と罪の原理からいのちと御霊の原理によって解放されたと宣言しています。これから悲しい事件が起きるか起きないかによって悲しみなのか喜びなのかではなくて、悲しむしかない人生そのものが葬られて、もう悲しみのない、悲しむ理由のない者として新しく生まれてくるようになります。死と罪の原理からいのちと御霊の原理の方に移動するようになります。だから聖書は、これを強調しています。Ⅱコリント 5:17、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなった。ニコデモに向かってイエス様がおっしゃった通りに、水と御霊によって新しく生まれなければ神の国に入ることはできません。イエス・キリストを受け入れることは、何かのことが改善されることではありません。性格の悪い人間が性格の柔らかい優しい人間に変わることではなくて、死と罪の原理に囚われて右に転んでも左に転んでも悲しむしかない悲しみの人生そのものが釘付けられて、葬られて、新しい存在が誕生することなのです。肉体的にそのままなので、その感覚がなかなか得られないかもしれませんが、信仰によって、義人は信仰によって生きる者なのです。イエス様の復活で悲しみそのものがお墓の中に葬られて全く新しいものとして生まれ変わるようになりました。このことをぜひ覚えてください。

2. イエス様の復活で、どんな悲しみに圧倒的に打ち勝てる。

なので二番目、イエス様の復活で、これからどんな悲しみがやってきても、それに圧倒的に打ち勝つことができるものになります。それがイエス様の復活なのです。

1) 昇天（御座）の準備

なぜかと言いますと、イエス様が復活なさったというのは、復活なさって再び弟子達とガリラヤの周辺を一緒に歩くためではありません。イエス様が復活なさったというのは、天に昇られるためなので

す。天に昇られるというのは、神様がいらっしゃる御座のほうに昇られるためでした。それが復活なのです。そして、イエス様は地上にいらっしゃったときに、特に最後の晩餐のときに弟子たちにおっしゃいました。わたしが父の元に戻ったときには、あなたがたにもうひとりの助け主、聖霊を送って、いつまでもあなたがたとともにいることができるようにしようとおっしゃいました。これがイエス様の約束なのです。天に昇られるということは、その約束を実現するためなのです。

2) ヨハネ 14:16、16:7

ヨハネ 16:7でもこのようにおっしゃいました。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです」。イエス様が離れていくことが、それはもしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けばわたしは助け主をあなたがたのところ遣わします。これが約束でした。それで復活なされて天に昇られるわけです。イエス様の復活で、イエス様は天に昇られて神の御座に座って、万軍の主とされました。それがイエス様の復活なのです。イエス様の復活を考えると、死の力が打ち破られたと同時に、イエス様は天に昇られて御座に座られた。両方が復活にかかっているわけです。両方覚えなさいといけません。それで約束通りに御座にいらっしゃる勝利の万軍の主イエス様は、約束通りに信じるひとりひとりに助け主聖霊を遣わし、聖霊を注いでくださいました。今も聖霊を注いでいらっしゃいます。だからイエス・キリスト、復活のイエス様を救い主として心に受け入れた人は、その人の内側に聖霊がともに住んでいらっしゃいます。これがイエス様の復活で成し遂げられたことなのです。

3) 1 コリント 3:16(肉の同行の限界)

だから聖書には 1 コリント 3:16 節、あなたがたは聖霊が宿る神の神殿であることが分かっていないのか。霊としていつまでも私たちとともにおられるために、限界なくいつまでもどこでも私たちとともにいらっしゃるために天に昇られて聖霊を通して再び私たちの内側に来られました。弟子たちとガリラヤの周りを歩いていた、つまり、肉を持って同行していることには限界があるわけです。だからイエス様は、わたしがあなたがたから離れて去っていくことは、あなたがたには益なんだ。でも今を生きるクリスチャンの私たちが「あっ、なるほどそうだ。ペテロよりマルコより私たちが幸いなんだね」と喜ぶべきなのに、私たちの肉の目にイエス様が見えないので、まるでイエス様が僕は遠いところにいらっしゃるかのような感覚で騙されているわけです。イエス様の復活でイエス様は聖霊を通して私たちの内側にいつもともにおられることになりました。もう限界などありません。なのでこの勝利のイエス・キリストが死の力を打ち破って勝利なされたすべての悲しみを葬られたイエス・キリストが内側にいつもともにおられるので、何一つ問題にならないし、悲しみになることなどありません。もちろん人間は感情を持っているので、何かの場面で涙を流してということは別に悪いことではありません。しかし、それが本格的な本物の悲しみにはつながってはいけません。内側にすべての悲しみをお墓に葬られたイエス・キリストと一緒にいらっしゃることを覚えていてください。

4) ローマ 8:39, 37, 28

このイエス・キリストは、ローマ 8:39、どんな被造物も引き離すことができません。8:37、どのような苦しみやどんな攻撃があっても、どのような弱さがあっても、圧倒的に消費できるようになります。それどころかローマ 8:28 には、良いこと悪いこと、今まで私たちは悲しいと思っていたすべてを働かせて益としてくださるようになります。なぜなら復活のイエス様、悲しみをすべてお墓に葬られたイエス様が私の内側にいらっしゃるから。そのイエス様に勝てるものはなにひとつ存在しません。イエス様の喜びと勝利に打ち勝てるものは存在しません。私たちが忘れるだけなのです。だから、どのような悲しみにも圧倒的に勝利できるようになります。その証拠こそが聖書です。ご存知のようにレムナント 7 人のことを思い出してみてください。すべてを失っても悲しまなくても結構なのです。すべてを奪われてもそれが悲しみになりません。どんなに失敗をしたとしてもそれは悲しみに繋がりません。死の影の谷を歩いている、そのような苦難の中でもそれが私の悲しみにはなりません。国が揺れた場合に教会が揺れる場合もありました。しかし、それも復活のキリストがともにおられる私にとっては悲しみにはなりません。イザヤの場合は、この世界が荒れ果てるという預言がありました。にもかかわらず全世界が荒れ果てても、それが私の私を悲しませることにはなりません。この証拠を握りましょう。ダニエルの場合は、死の恐怖が襲いかかってきました。その死の力でさえ私を悲しませることができません。これが証拠ではないでしょうか。皆さん、見ながら不

思議に思わないでしょうか。私たちのレベルはいつもこれがあるから悲しい。これがあるから怒って、これがあるからフラフラ心配するのが普通で当然だと思っているのではないのでしょうか。なのになぜレムナント7人はそうではなかったのか。イエス様の復活を彼らはそれを前もって信じていたわけです。キリスト・イエスを掴んでいました。ましてやよみがえられたイエス・キリストを受け入れた今の私たちはうまでもないでしょう。イエス様の復活で何が変わったのかを本当に信じていないからです。皆さんの内側で世の中の人生において自分の周りの何がどう変わっても、どのような問題があっても、それは悲しみになることができないように宝のキリストが内側にいらっしゃるわけです。これがイエスの復活なのです。パウロはその代表的な苦難がやってきて迫害を受けて、到底これは人が生きることではないと思われるような状況がずっと続きましたけれども、パウロはその苦しみのゆえに私は悲しいよと言ったことは一度もありません。信徒さんがむしろパウロのそのような境遇を見て心配して悲しんでいるのを見て悲しんでいました。喜びなさい。喜びなさい。刑務所の中で外にいる人間に向かって喜びなさいと。言い換えますとあなたがたは悲しみとは無縁の存在に作り変えられているんだよ。イエス様の復活を覚えなさいというメッセージなのです。皆さんは今の皆さんではありません。イエス様が復活なさったことで皆さんの内側に聖霊を通して勝利のイエス様が一緒に住んでいらっしゃる尊い神様の子どもなのです。だから、どのような悲しみにも圧倒的に勝利できるようになります。

5) IIコリント 4:7-9

何回もこの箇所を皆さんに申し上げますけれども、IIコリント4:7-9、一番苦勞していたパウロ、私たちのレベル、世の中の一般のレベルから見ると毎日が涙だらけの人生にならざるを得なかったパウロの告白です。「私たちは、この宝を、土の器の中に入れていっているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」。だから悲しみませんということです。人間は感情を持っているものです。しかし、その感情でさえ神がいらっしゃらないときに形成され、学習されて慣れているものなのです。脳がそういうふう形成されてそのように指令を出すわけです。だから、それを真に受けて相手にしてはいけません。いつもイエス・キリストが先なのです。信仰によって生きる者です。

3. イエス様の復活で、私の復活は保証された。

最後、イエス様の復活で私、自分の復活が保証されました。信じますか。

1) 黙示録 1:5、1コリント 15:20、23、ローマ 8:23

黙示録1:5にこう書いてあります。「また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方」。最初によみがえられた方というのは、これからまた二番目、三番目、同じくよみがえられるということが大前提ではないでしょうか。Iコリント15:20、23「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」。23「しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です」。ローマ8:23「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」。イエス様が再臨なさるときに、その前に死んだ人でも、その時に生きている信者でもみなイエス様のからだと同じものに復活なさってよみがえられて新しい天と新しい地で生きることができるようになります。これが保証されています。イエス様の復活はただの復活ではなくて初穂です。初穂を覚えてください。イエス様の復活を見ると、「なるほど、私もあのように復活するんだね」という保証なのです。

2) 真の希望

だから、この地上を歩きながらもそこら中の人と生きる希望などが違います。目標もゴールも違います。イエス様の復活で私たちに真の希望が生まれました。その希望こそが新しい天と新しい地であり、そこでイエス様と同じからだに復活されることです。これが希望なのです。

3) 地上のものや世のものから自由

だから、この地上を歩きながらも地上のものやこの世のものから自由になります。イエス様の復活の祝福が本当に分かっているものは地上のものに左右され、泣いたり、笑ったりするようなレベルを超越して行くようになります。このような人生を歩く者を指して巡礼者と言います。クリスチャンは旅人してこの世を歩く者なのです。それは消極的な意味ではありません。幼児洗礼を受ける親にも言いました。子どもは親の所有ではなく、神からの賜物であって、神の絶対計画を持って生まれたものなんだ。これを親の役目を与えてあなたがたに神様が託しただけです。だから管理人としての自覚を持って子どもを育てないといけないというふうに勧めました。私たちはこの世にさまざまな職業、いろいろな出会い、いろんなものが絡んで生きていきます。しかし、そこに目的があります。旅人なのです。旅の途中なのです。だから旅程という言葉を使うんですね。なぜでしょうか。イエス様の復活で私の復活を見たので、新しい天と新しい地、そこに結局、私たちは住むようになりますので。この真の希望のゆえに、世にあるもの、地にあるものに対して執着したり、未練を持ったり、羨んだり、また怖がったりというようなことなどありません。ただひとつ、地上にいる間の目標はだからこそ世界福音化、福音宣教。イエスの証人として人を生かすことだけなのです。そのために同じ目標に向かって、あるクリスチャンは政治家になったり、あるクリスチャンは芸術家になったり、あるクリスチャンは事業家になったり、あるクリスチャンは牧師になったり。でも生きる理由はみな一つです。なぜならこの世に希望などを持たないから。となると、職業や才能や健康やお金や経済や家族やすべてがこの聖なる目標、福音宣教、このサタンに国にまみれているところにサタンの国が砕かれて、神の国が臨まれる、いのちの祝福が与えられることのための道具なのです。聖なる道具なので大事に管理しないといけません。自分勝手になくてオーナーの神のルールに従って管理しないといけません。お金も健康も家族も仕事も才能もすべてです。何の仕事が偉いのか。クリスチャンにはそういうことはありません。レムナントのときにそれが私にとっては何なのかということ祈りつつ見つけていかないといけません。大人の方々は試行錯誤を通して今に至っているでしょう。今許されていること、そこが宣教地だと思い、皆さんの許されていることを管理人としての意味合いを持って大事に大事にするクリスチャンにならないといけません。クリスチャンなのに新しい天と地を希望にするとと言われると、地上にあるものをでたらめにするという場合もありますけれども、それは言語道断です。だからといって地上にある物に執着するかというとそれも言語道断です。イエス様の復活でクリスチャンの希望は明らかになりました。明日死んでも構いません。でも死なないでいるのは福音宣教のためです。学生さんは学校に行く時に福音宣教のために今、勉強が許されて勉強に行く。だから、この勉強は聖なるものなんだと祈りつつ勉強に福音宣教のために用いられる道具になるように光を与えてくださいと祈りつついくわけです。ただ、偉い成績をとるために祈るわけではありません。なぜなのでしょう。イエス様の復活で私の復活を見たわけです。本物の希望が何かを確認しましたので。子どもを育てるときにも執着して、あるいは自分勝手にする。なぜそうなるのでしょうか。本当の希望を知らないからです。自分が管理人だという自覚がないからです。皆さんの所有ではないので、親の勝手にやるものではありません。神の御心に従って子どもを育てないといけません。だいたい皆さんのやり方は間違いだと思えばほぼ正解です。

まとめましょう。今日はイエス様の復活を心から感謝してお祝いする礼拝で、また聖餐式も行い、洗礼式もありました。何よりイエス様の復活で何がどう変わったのかいうことに目を留めましょう。それでどのような状況でも私たちはイエス様の復活で何がどう変わったのかが自分自身に納得できればどのような状況で、どのような問題があろうが必ず使徒1:7,8に立たされるようになります。私は信じております。死の影の谷を歩いていようが、精神的に非常に悩んでいようが、勝てないという問題があるのでしょうか。イエス様の復活ですべての悲しみは葬られて、どのような悲しみにも圧倒的に勝利できる、そして、私の復活が保証されていることが分かれば、私たちが気になって心配してこだわっているものに対して、それはあなたは知らなくてもいいです。それはあなたがたがこだわるべきテーマではない。Only 聖霊が臨まれると、復活のイエス様を受け入れたあなたがたには他の人にはない特権があるんだよ。聖霊が注がれて聖霊に満たされて聖霊の力を頂くようになっているのに、なぜよそ見をしているのか。なぜ余計なことを考えているのか。なぜ計算して頭を回しているのか。なぜ感情に振り回されているのか。なぜ是々非々などに引っかかっているのか知らなくてもいいよ。もう終わったんだから。Only 聖霊が臨まれると御座の祝福が豊かに臨まれると、あなたがたは地の果てにまで証人となるよ。必ずこれを握って使徒1:14、祈りに専念していた、そのタラップンの人のように祈りの人になります。周りから見ると何あれ？と無視されるかもしれませんが祈りの人になりま

す。祈りの人に勝てるものではありません。それで結局、証人の道が開かれます。この世を生きる本当の理由が成就するようになります。ぜひイエス様の復活によってこのような勝利の人生を歩んでいただくようになることを祈ります。

(祈り)

恵み深い父なる神様。イエス様の復活ですべての悲しみが葬られ、どのような悲しみにも圧倒的に勝利でき、またイエス様の復活は私の復活であることを覚えて何物にもこだわらないで負けないで心配しないで、そして、自分のレベルに留まらないで、Only 聖霊が臨まれると、この約束を握って祈りに専念する勝利のクリスチャンになるようにひとりひとりを祝福してください。 イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン